

令和2年度 近畿大学原子炉利用共同研究等実施状況

近畿大学原子炉利用共同研究等は、低出力原子炉の特長を活かしたユニークな研究も多く、また使いやすい原子炉構造のため、広範囲かつ多様な研究に使われ、長年活用されてきました。また、わが国においては、東京電力福島第一原子力発電所事故後も、原子力人材育成の重要性が認識され、それに資する原子力教育の実行が求められています。日本の大学が所有する原子炉は京都大学の2基と近畿大学原子炉（以下、近大炉）のみです。近大炉の果たすべき役割は大きいと思います。この共同利用研究等を通じて、原子力・放射線分野の研究進展に寄与するとともに、これに携わる大学院生を含めた研究者・技術者等の人材育成に資することができますと幸いです。本年度は、従前の研究分野に加えて、教育利用を位置づけて応募し、4件を採択しました。

令和2年度の共同利用研究等は以下のとおりに実施されました。

- | | | |
|----------------------|-----|---------|
| 1. 原子炉物理・原子炉応用に関する研究 | 12件 | (13件採択) |
| 2. 原子炉化学・放射化学に関する研究 | 0件 | (1件採択) |
| 3. 生物の放射線影響に関する研究 | 2件 | (3件採択) |
| 4. 原子炉を用いた教育 | 3件 | (4件採択) |

上記の利用実績は、利用日数：40日、原子炉運転時間：196.89hr、出力量：115.72W・hr、来所延人数（旅費支給者）：92人でした。

本年度は、昨年度と同様に原子炉施設において運転にかかわるようなトラブルはありませんでした。しかしながら、令和2年2月からの新型コロナウイルス感染拡大によって都道府県をまたぐ移動が制限された時期がありました。上記の括弧内は研究課題の採択件数を示していますが、4件は1回も利用できませんでした。このコロナ禍にあって、共同研究者は研究・教育において通常通りにはいかない不自由さを感じた1年でした。このような状況にあっても、一部ではありますが、研究計画が遂行されたのは、共同研究者の熱意と関係各位のご協力の賜と心より感謝申し上げます。

この共同利用研究等は、昭和63年から大阪大学工学部・工学研究科を運営主体として実施されてきましたが、同研究科の諸事情により令和3年度を最終年度として終了することとなりました。これまでこの共同利用研究等を守り大切に受け継ぎ支えていただいていた大阪大学の関係各位に厚くお礼申し上げます。令和4年度以降も共同利用研究等が続けられるように近畿大学で準備を進めています。今後とも、原子力の研究活性化のため、共同利用施設である近畿大学原子炉を有効に利用していただければ幸いです。

これからも関係各位のご支援・ご協力をお願い申し上げます。